

第24回小諸・藤村文学賞最優秀賞受賞作品

中学生の部

## 被災地に立って感じたこと

長野県上田市立真田中学校二年

安田 美結

去年の八月三十日に、台風十号が東北と北海道に上陸しました。昭和二十六年に気象庁が統計を取り始めて以来、初めて東北地方の太平洋側に上陸した台風だそうです。

私のおじいちゃんは、被害が大きかった岩手県の岩泉町に住んでいます。今年のお盆に岩手県に行って、初めてどんなに被害が大きかったかが判りました。家は山間部にあるので山が崩れて、土砂や水や木材が家を直撃しました。家の半分以上は泥でいっぱいになって、道路は崩れてヒビが入り、土がむき出しになっていました。木は折れて民家は基礎が流されているところもありました。近所の人々が亡くなっていました。私はこの悲惨な光景を見て、その場にいた人はどんなに怖い思いをしたのか、どんなに大変で悲しい思いをしたのかと思いました。明るい時間に景色を見た時は、余りにも変わり果てていて驚きました。

私のおじいちゃんは、左半身が麻痺している状態で一人暮らしをしています。毎日ヘルパーさんが来ないと、料理と洗濯、掃除、排泄物の片付けが出来ません。デイサービスを利用しないと、お風呂と麻痺した左手足のリハビリが出来ません。つまりおじいちゃんは、福祉サービスを利用しなければ生きていけないのです。しかし、台風で利用していた施設は、死者が大勢出る程大きな被害を受けまし

た。おじいちゃんの家に行く道の途中は、いくつも道路が無くなっていて、車が通行止めになり、福祉車両が走れなくなったので、福祉サービスが利用できなくなりました。

おじいちゃんが暮らしている地域は、過疎地域です。住んでいる人の殆どが高齢者で、若者はいません。近くにはスーパーが無く、遠くまで行かないと買い物が出来ません。公共施設も少なく学校まで歩いて一時間もかかります。人が少ないので、一人暮らしの人は一日誰とも話さなかったという日もあります。

私は過疎地域について、人の助けが必要な地域だと思います。例えば移動販売があれば遠くまで買い物に行かなくても済みます。訪問の医療があれば、病気になってもすぐに診察をしてもらうことが出来ます。福祉車両があれば、福祉施設に行って色々なサービスを受けることが出来ます。このように高齢化が進んだ過疎地域の人には、いろいろな面で人の助けを必要としているのです。

反対に、過疎地域にも良い所があります。おじいちゃんの命は、地域の方達のお蔭で救われました。おじいちゃんは鉄砲水に流されて、家の前にある道路で一晩を過ごしました。

翌日、おじいちゃんのことを心配した地域の方達が、命綱を繋ぎ合って危険を顧みず助けに来てくれました。弱っていたおじいちゃんを自衛隊のヘリに乗せてくれ、おじいちゃんは病院に運ばれました。自分達も避難しなければならないのに、「おじいちゃんを助けるまでは自分達もここに残る」と言って、自分の家族のようにおじいちゃんを心配してくれました。普段からおじいちゃんのことを気にかけていないと、絶対にできないことだと思います。おじいちゃんの住む地域には、強い絆があるのだと感じました。入院したおじいちゃんは、何度も「家に帰りたい。地域の皆も心配だ」と言いました。きっと、地域の皆に会いたいという思いが強いんだと思いました。

退院したおじいちゃんが「家に帰りたい」と強く願っていたので、おじいちゃんが家に戻れるように、皆で考えることになりました。

元々住んでいた家は、土砂や泥や木材でいっぱいだったので、ボランティアの方に協力してもらって、家の取り壊しが行われました。

奇跡的に残っていたシイタケをパック詰めするための作業小屋に住めるように、お母さんの姉妹やおじいちゃんの兄弟の大工さんが協力してくれ、おじいちゃんは今、作業小屋に住んでいます。

沢山の人の小さな力が集まったから、こんなことが実現したんだと思います。おじいちゃんのために県外からも沢山のボランティアの方が来てくれて、感謝の気持ちでいっぱいです。

過疎地域には、住んでみないとわからない人々の温かさがあると私は思っています。おじいちゃんの住んでいるところは決して便利ではありません。でも、不便だから困っている人を自然と助け合おうとする気持ちが生まれます。人に助けられると感謝の気持ちが生まれます。そして、今度は自分も誰かのために役に立ちたいと考えるようになります。おじいちゃんは、便利さよりも大切なことがあるから、これからもずっと住み続けたいと思っているのだと思います。動けない体で流されても、家がなくなっても諦めなかったおじいちゃんを支えていたのは、大勢の人の相手を思いやる気持ちです。どんなに世の中が変わっても、おじいちゃんの周りにはある相手を思いやる地域の皆さんの心は、ずっと変わらないと思いました。